

第23図 「大手坂参道」脇堀跡の出土品(その1)(1/4)



第24図 「大手坂参道」脇堀跡の出土品(その2)

磁器(第23図3~5)3の甕は、灰白色の胎土の上に、外面肩の部分三ヶ所にきついコバルト色の釉をかけ、外底と内頸を除く内外全面に黄灰色の上釉をかけたもの。花生と思われる4は、純白の素地に、竹林で文字を書いた紙人(または布)を中心に人物七人をコバルトで描いた染付

け。5の碗は、純白の素地に、二種のスタンプを使ってきついコバルト色の花文とくすんだコバルト色の唐草状の文様とを描いた染付。鍍瓦(第23図6)中央に三巴を配し、その外に珠文を繞らしたもの。

(笠野 毅)

四 桃山陵墓地内銀明水の井戸浚えに伴う調査

桃山陵墓地は、慶長元年(一五九六年)木幡山に構築された伏見城の域内に当る。従って現在でも伏見城の遺構が陵墓地内の所々に点在する。

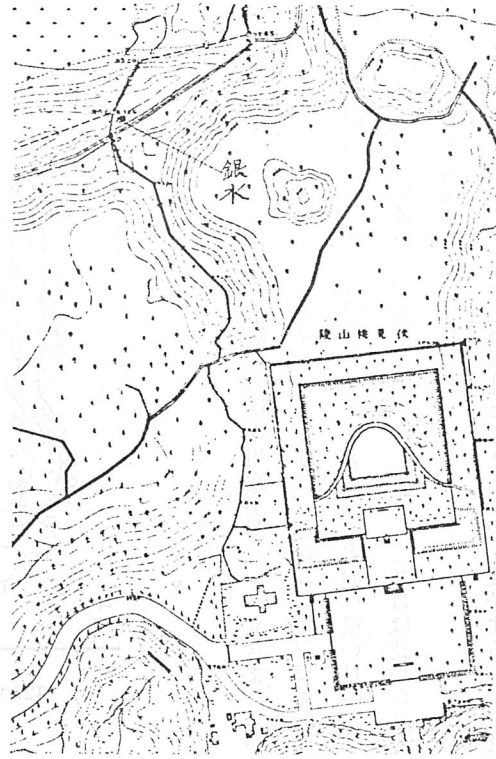
その遺構のひとつに、この城を築いた秀吉が茶の湯を楽しむために使ったと伝えられる銀明水と称する井戸が現存している。宇治川の水脈が地下水となり、この井戸に涌出していると想像される浅い井戸であるが、今でも満々と水を湛えている。近年相当に泥土と塵芥が流入して汚染して来たので、昭和五十一年九月二十四日、浚渫作業を監区職員の手で実施した。

井戸の位置は、檜樹、杉樹等が密生している樹林地帯の裾で、伏見桃山陵の北西約三〇〇メートルにある通称伏見城の「本丸」北側にあたる窪地にある(第25図)。

井戸周辺の雑木、雑草を除去すると、ほぼ外郭を確認することができた。外郭は、約二米四方で直径約二〇センチの石で地上に二〜三段に積

井戸内に溜っている泥土・塵芥を除去浚渫した結果、次の事が判明した。井戸側は、底面までの深さ約一四〇センチ、構造は、四方に割石で空石積五〜六段に積上げ、用材は灰白色に黒点のある直径約四〇センチの花崗岩が使用されている。又底面には、栗石大の石が敷かれているが、所々かく乱をうけ地山かと思われる堅い砂礫層が露出している。又、底部の南東隅には、地下水の涌出口があつて、ここから少量の地下水が間断なく井戸内に流入している。井戸内に落込んだ岩石や、堆積した土砂等を取りのぞく途中、次の様な遺物を採集した。いずれも完形品

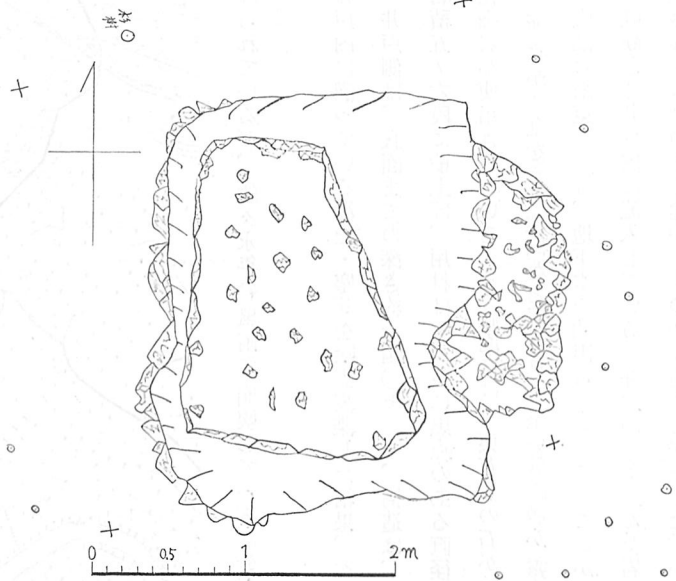
上げられているが、所々永年の風雨で崩壊している部分が見受けられる。



第25図 銀水位置図(縮尺 1/2000)



第26図 銀水井戸現況



第27図 銀水井戸平面図 (縮尺 1/50)

は無く小片又は破片で、木製品の様な用途不明のものも含まれている。

イ 瓦六点 五〜一〇センチ前後の小片で、色は淡青色又は茶褐色で、表面の燻しの残ったものもある。布目は裏面に粗い目の残るもの一点で、表面はいずれもなでつけられていて布目は認められない。いずれも桃山時代以降のもの。

ロ 陶器片四点 大形瓶子の胴部と考えられ四片接続する。胎土は灰色

で厚さ二ミリ表面は透明釉をかけ、これに白釉で文字を描き文様とする。江戸末期〜明治時代。

ハ 磁器破片一点 「そばちよこ」の口縁の破片、厚さ一〜三ミリ、白地に藍絵を施す。江戸時代〜明治時代。

ニ 木栓一点 長さ六・五〜六センチ、直径上部五センチ、下部三・七センチ、材は杉のようである。樽か大瓶のもの。

ホ 木棒一点 長さ約八センチ、直径約三センチの桜の皮付の丸棒で、一方の小口はきれいに切断した面を残している。

(南 智次郎)